

文は人なり。連載コラムのタイトルにこの言葉を掲げたのは2年前のことだ。その理由をつつとてみたいと思う。フランスの博物学者ビュフォン

の言葉だが、僕なりの解釈はこうだ。自らと向き合いながら一つひとつの言葉を紡いでいくのが文章。言葉を紡ぐ過程で「わたし」というフィルターを通り、自らの思想や価値観が文体をつくり上げていく。書き手がどんな人間であるか、文体はそれを映す鏡となる。だから、美辞麗句や秀逸な言い回しを操っても読み手を欺くことはできない。文章スキルだけではない。文章スキルだけでは

人間性をも磨かねばならぬ。自分を律するために、僕はこの言葉を胸に刻んでいる。

テレビをつけてみる。知的な人なのに言葉の使い方を間違えたり、平気で「ら抜き言葉」を多用したりしていて、がっかりさせられることはないだろうか? 「文章」もそうだ。ちょっとしたミスを犯しただけでも品格を疑われることになりかねない。僕もまたしかりだが、思い込みや勘違いをしたまま使っている表現は、案外多いものだ。昇任試験論文の添削指導でも間違った表現を指摘することはとても多い。

先日、「人材育成」をテーマにして書いた論文が僕の手にやって来た。論文なのに「やって来た」と擬人法を用いた

にはワケがある。受験者本人が論文を持ってくるわけではなく、その家

辞書が1冊もない!?

族や上司が僕の知り合いだという縁で添削を頼まれるケースが数多あるからだ。

一方で、「気が置ける人になるように努める」という解決策でメンターとメンティーとの関係づくりについて書いた受験者もいる。これは「気が置けない」と「気が置ける」を全く逆の意味で解釈しているケースだ。4冊の座右の辞書が僕の書齋にあるが、そのうちの1冊を引いてみよう。

「機運」はだんだんとそうなっていく頃合い、時の巡り。「気運」は自然にそうなっていく様子。ニュアンスの違いはあれども意味に大差がないので、昇任試験論文では「機運」を用いるように指導している。表記ゆれを起こして、1本の論文で両方を用いているケースもあるが、これは採点官泣かせになるかもしれない。「くらい」と「ぐ

文の他に手書きで書くことはないかもしれない。パソコンの変換キーを押せばいくつかの候補が提示されて正しいものを選べばよいし、スマホの辞書機能が充実しているから困らないらしいが、本当にそうだろうか。論文の採点を務めてみると誤字・誤用のオンパレードに遭遇することになる。壁の穴は壁で塞げ。こ

「情けは人のためならず」というのが正しい表現であり、「人に情けをかける」と、巡り巡って結局は自分のためになる」という意味だ。しかし、彼女は「人に情けをかけると結局はその人のためにならない」という意味で使っていたのだ。解釈が難しい言葉かもしれないが、昇任試験論文での誤用は減点される破目にもなりかねない。

「気が置けない」は気を使わずに気楽につきあえること。「気が置ける」は相手とのあいだに自然に心づかいが置かれる、つまり何かと配慮がいるという意味なのだ。この受験者は「ささいな相談でもしやすいうちに」が置けない人になる」ということを主張したかっただろう。使い慣れない言葉で墓穴を掘らないようにしたいものだ。「機運」と「気運」、

「くらい」と「ぐらゐ」も使い分けに迷う人が多

い。最近、若い人と話している、辞書を1冊も持っていない受験者がいるのは驚いた。手書きで文章を書く機会はたしかに減った。いや昇任試験論